

朝鮮人シベリア抑留： 彼らは「戦後」をどう生きたか

『朝鮮人シベリア抑留——私は日本軍・人民軍・国軍だった』（東京外国語大学出版会、2023）の著者・金孝淳氏と東アジアの戦後を考える書評会

【日時】 2023年 7月 29日（土） 14:00 pm-17:00 pm

【場所】 東京外国語大学海外事情研究所(研究講義棟4階 会議室427)
西武多摩川線「多磨」駅下車(JR中央線「武蔵境」駅のりかえ)ほか
<http://www.tufs.ac.jp/access/tama.html>

【使用言語】 日本語（通訳もあり） 【会議形式】 対面

- (提題者) 有光健 (シベリア抑留者支援・記録センター代表世話人)
小林昭菜 (多摩大／国際関係・冷戦史・日ソ関係史)
(コメンテーター) 内海愛子 (一般社団法人 新時代アジアピース・アカデミー共同代表)
藤井豪 (東京外大／朝鮮現代史)
(レスポンス) 金孝淳 (ジャーナリスト・『朝鮮人シベリア抑留』著者)

(司会) 渡辺直紀 (武蔵大) 小田原琳 (東京外大)



シベリア抑留——アジア・太平洋戦争の末期、参戦したソ連軍に武装解除されて捕虜になり、シベリアに移送されて強制労働に従事させられた旧「日本兵」には、植民地だった朝鮮や台湾の出身者もいた。日本本土に戻った抑留者が、1950年代の帰国からほどなく社会復帰し、一線で社会運動や文化運動に従事したのに比べて、朝鮮半島に戻った抑留者は、「戦後」に冷戦／熱戦の場となった故国で、シベリアでの経験を訴えられる場はどこにもなかった。また、なかには自らの「兵士」としての経験を、帝国日本や満洲(関東軍)、北朝鮮(朝鮮人民軍)、韓国(国軍)で貫徹せざるを得なかった者たちもいた。そのような朝鮮半島出身のシベリア抑留者たちの体験とその後の壮絶なライフヒストリーを描いた『朝鮮人シベリア抑留』の著者・金孝淳をソウルから迎えて、本書で提起されている問題をどう読み解くか、この問題の関連分野を一線で探求してきた提題者・コメンテーターらとともに考える。



【著者紹介】 金孝淳(キム・ヒョスン)

1974年ソウル大政治学科卒。東洋通信、京郷新聞を経て『ハンギョレ新聞』創刊に参加し、東京特派員・編集局長・編集人(主筆)を務めた。2007年から現場に戻って「大記者」の肩書きで活動し2012年に退社した。「フォーラム真実と正義」共同代表を務め、韓日関係、東アジアの平和・和解・市民運動などをテーマに執筆し、歴史から葬られた人々に対して関心がある。著書に『私は戦争犯罪人です——日本人戦犯が改造した撫順の奇跡』(2020)、『歴史家に問う』(2011)、『近い国、知らない国』(1996)などがあり、邦訳として本書以外に、『祖国が棄てた人びと——在日韓国人留学生スパイ事件の記録』(2018)や『間島特設隊——1930年代満洲、朝鮮人で構成された親日討伐部隊』(近刊)などもある。

【主催】 東京外国語大学海外事情研究所+WINC (Workshop in Critical Theories) + 東京外国語大学出版会 + 科研費基盤研究(B)「冷戦文化形成期(1945-1970)韓国文学・文化史の再認識」(20H01252)

【問合せ】 小田原琳(東京外大)rodawara@tufs.ac.jp 岩元省子(WINC事務連絡担当)winc.dream2@gmail.com
渡辺直紀(武蔵大)wata2002@hotmail.com